

下思想史の大著を學界に惠まれる日を切に待望したい。〔三十一年二月刊・岩波書店・全書版、14+273+42頁〕（櫻井）

◇ 法然上人傳の研究

田村 圓澄著

著者は既に、雜誌「佛教史學」(二)の一(三)や「佛教文化研究」(一・二)に、その斬新な研究成果を發表して來た。當書はそうした既往成果をも集録し、法然傳全體を鳥瞰しようとしている。

當書内容の第一部は、法然傳研究の障礙より起筆し、諸傳記本の成立系譜や傳記作者の立場を克明に論述している。

第二部では、法然の誕生より入寂に至る間を編年し、その間における問題點を逐一、分析考證する。第三部においては、法然傳における諸問題の内、遁世と命名・傳記作者と天台教團・學匠・法然傳に現れた念佛者・遺誡文と起請文・三昧發得記・夢感聖相記・選擇集撰述とその付屬・源空聖人私日記と法然上人傳記(醜稿本)をとりあげ、それぞれ注意すべき所見を披瀝している。

周知の如く、その根本史料を缺く法然

傳は、きわまる所、蓋然のたらざるを得ぬが、然し著者はその巨覺の上になつてよく諸傳記成立の系譜と事狀を明かじ、傳記における潤色を是正する事によつて法然傳研究を歴史學の水準にまで高めしめた。客觀的な法然眞傳が、萬人の納得をもつてむかえられる日は、いよいよ遠いであろうが、然し法然傳における傳説生起の根源を、それぞれの時代と作者の立場において科學的に分析しつくした事は、法然研究史上、一時期を劃したものであるとして永く銘記されるであろう。〔法藏館刊二九五頁七〇〇圓〕 (北西)

◇ 淨土教美術 石田一郎著

◇ 密教美術論 佐和隆研著

凡そ、佛教藝術はそれが佛教信仰あるいは佛教諸儀軌の藝術的表現を試みてゐるのであるから、單なる様式・形式論を中心とする、いわゆる美術史學の理論と方法は、宗教藝術研究の上にはそのまま適應されないといえよう。こうした意味において、本格的に佛教藝術の本質論の

検討を試みたものに石田・佐和兩氏の研究がある。

石田氏の『淨土教美術』は、『文化史學』『人文學』『文化學年報』に掲載された論文を集成補筆されたもので、論旨は主として、氏の提唱する文化史學的考察の上から、淨土教藝術の構成理論を追究している。即ち、日本淨土教美術史の理解を「惠心教美術」「法然教美術」「親鸞教美術」に分類してそれぞれの藝術的表現の教理史的検討を徹底的に検討し、その系譜的關連を「來迎圖の展開」において纏めてゐる。そして、同じく淨土教に屬する惠心教と親鸞教が「一は如來を眞如として靜的に捉えるに對し、二は彌陀を本願力として動的に押えて」いる點を指摘し、その造型藝術展開をかかる教理的理解によると、法然教は惠心教と親鸞教の中間に在つて、廻轉の中樞として惠心教を離轉し親鸞教に裏返へして個人化・内面化したという。氏の論旨は從來、作品第一主義の立場からこれらを一括して淨土教美術として理解した美術史研究に對し、内容の検討から三類に分けて理解し、とくに難解な諸般の教義理

解に徹したことは注目に値いする。

日本佛教藝術の中において淨土教美術と相對して考えられるのは密教美術であるが、佐和氏の『密教美術論』は、とくに難解な密教儀軌の研究に永く没頭されて完成されたものである。密教美術という甚だ理解の困難な問題を、とくに觀音不動を中心に、その儀軌・信仰の變遷に伴う藝術的表現の變化の跡を檢討し、廣く中國その他の原初的なものにまで言及し、民族宗教の佛教受容に伴う佛教藝術表現形態の變遷過程を説明しようとしたものである。就中、永く秘寶とされていた岡城寺藏黃不動・觀心寺藏如意輪觀音の説明をみることは意義がある。そして、密教的佛・菩薩の量的に豊富な密教美術的特質を、佛教自體の獨自の發展によつてなしたものではなく、印度教及びその他の民間信仰の神々との接觸交渉によつて成立したもので、「密教に於いて印度教が佛教化され」「印度教的表現が佛教的表現に展開していく過程を示したものである」とされた。

兩著の説くところは、ともに佛教藝術の究明にあつたが、それぞれ淨土教・密

教の特質を中心に検討を試みたわけであるから、淨土教・密教に關する限り十分に説かれているが、佛教藝術の説明に十分でない。しかし、このことがまた個々の研究の不十分な點に指摘されるのであつて、例えば、密教美術は量的に豊富な佛・菩薩等が統一的に密教儀軌の中にまとめられる姿を捉えるのでなければならぬ筈であり、つまり密教における曼荼羅の表現の藝術學的解釋を必要とする。

石田氏の著書の場合、淨土教教理史の精密な検討とともに、淨土教信仰の藝術的表現が具體的にどのようであつたか、つまり、藝術作品をオーソドックスな美術史研究史の立場をある程度考慮しなければならぬと思う。しかし、兩著が難解な佛教藝術研究の上に、從來のそれとは異つた新しい研究の理論と方法を導入したことは、向後學會に寄與するところ大なるものがある。

(淨土教美術・平樂寺書店刊・九五頁・A5百圓)

(密教美術論・京都便利堂刊・二一六頁・圖四二頁・B5・八五〇圓)(高橋)

#### ◆ 冠導阿毘達磨俱舍論索引

舟橋水鼓編輯  
舟橋一哉増補

先年、本學研究室で謄寫印刷發行されたものの出版である。阿毘達磨諸論書の中心である俱舍論の項目索引は多年要望せられるものであつたが、舟橋一哉教授が故舟橋講師の草案に基き増補完成されたものである。項目に参照を附し、畫引檢音索引を巻頭に設け、項目の巻・頁・面を算用數字・英字で見易くしてある等の種索引としては至便のものである。(三十一年四月刊・27×19.5cm・五百圓・法藏館)

#### ◆ 御傳鈔講話

岩見 護著

御傳鈔上下卷の各段に従ひ、「少年出家」より「大谷の本廟」まで二十三項目に互つて宗祖親禪聖人の業蹟をたどると共に、著者の宗祖觀を表出したものである。平明な文章と共に著者の聖人讃仰の書でもある。(三十一年四月刊・A5・二八二頁・三百圓・大谷出版社)